

平成 16 年度

## 北嶺中学校入学試験問題

---

国 語

---

(注意)

- 1 問題用紙が配られても、「はじめ」の合図があるまでは、中を開かないでください。
- 2 問題は全部で **4 枚**で、解答用紙は 1 枚です。「はじめ」の合図があったら、まず、ページ数を確認してからはじめてください。もし、ページがぬけていたり、印刷されていなかったりする場合は、静かに手をあげて先生に伝えてください。
- 3 答えはすべて解答用紙の指定された解答らんを書いてください。
- 4 字数が指定されている場合には、特に指示のないかぎり句読点も数えてください。
- 5 質問があったり、用事ができた場合には、だまって手をあげて先生に伝えてください。ただし、問題の考え方や、言葉の意味・読み方などについての質問には答えられませんので注意してください。
- 6 「おわり」の合図で鉛筆をおき、先生が解答用紙を集めおわるまで、静かに待っていてください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある寒い雪の晩方(ばんがた)のことであった。私はだんだん暮れ沈んで雪が青くなつて見える門の前で、いつまでもやむこと①のない北国の永い降雪期(ふゆ)を心で厭(いと)いながら、あの何ともいわれないさびしい音響(おと)という音響(おと)のはたと止んだ静かな町を、寒げに腰をまげて縮んだように行く往来(わらい)の人を眺(なが)めていた。近在(きんざい)の人であろう。みな忙(いそ)しげに、しかも音のない雪道(ゆきみち)を行くのを得もいわずさびしく見送(みおく)っていた。どの人を見ても瘦(やせ)せて寒(さむ)げであった。

私はふと気がつくとき、シロが(A)、しかも耳(みみ)から鮮血(せんけつ)を白い毛並(け)のあたりに、痛々(いたいた)しく流しながら帰(かえ)って来る②のを見た。私はかっとなつた。

「シロ！誰にやられたのだ。」

と、私は③この哀(あは)れな動物(どうぶつ)にほとんど想像(さくご)することのできないほどの深い愛(あい)を感じた。そしてこの耳(みみ)を噛(か)んだ相手の犬(いぬ)にむくいなければならなかつた。

「シロ！行け。どこでやられたのだ。」

と、私はシロとともに無暗(むやみ)に興奮(きんぷん)して、シロの来た方の道(みち)を走(は)った。シロは高く吠(わ)えて私(わたし)より先に走(は)った。

シロは裏町(うらまち)④のある家の門(かど)のところ、急に唸(うな)り出した。門(かど)の中から黒白(くろはく)の斑点(はんてん)⑤のある大きな犬(いぬ)が飛び出した。シロは私(わたし)という加勢(かせい)に元氣(げんき)づけられたために、いきなり飛びついた。けれどもシロは小さかつたために仰(あ)向けに組み敷(くみぢ)かれた。シロは悲鳴(ひな)を挙げた。私はもう我慢(がまん)ができなかつた。いきなり下駄(くだ)を脱(ぬ)ぐと雪⑥の⑦中(な)を素足(すそ)になつて、上に乗りかかつているシロの敵(てき)をめちゃくちゃにひっぱたいた。敵(てき)は悲鳴(ひな)をあげた。シロはその隙(すき)に起き上がって完全に敵(てき)を組みひいて噛(か)みついた。

「シロ。しつかりやれ。僕(ぼく)がついてる。」

と、②私は冷たさもしらないで雪の上(うへ)をとんとん踏(ふ)んだ。シロは勝(か)った。

と、そこへ門(かど)の中から私(わたし)より③二級上(にきゅうじょう)の少年(せうねん)が出て来た。そしてこんどは自分の犬(いぬ)にけしかけた。

「生意氣(せいき)言うな。きさまの犬(いぬ)より僕(ぼく)のやつは強いんだ。」

と、私は彼(かれ)の前(まへ)へ飛びかかるように進(すす)んだ。

「そんな汚(きた)い犬(いぬ)が強いもんか。」

と、彼は(B)言った。

「犬(いぬ)より君(きみ)の方があぶないよ。家(いえ)へはいつていた方がいいよ。」

「小さくせに生意氣(せいき)をいうな。」

「もう一度(いちど)言(い)え。」

と、こう私は言(い)つておいて、いきなり得意(ていぎ)の④組打(くみうち)をやった。私は彼の背(せ)を両手(りょうて)でしつかり抱(だ)いて、くると、腰(こし)にかけて雪(ゆき)の上に投げつけた。そして私は馬(うま)乗りになつて自分でどれだけ撲(なぐ)ったか覚(し)えないほど撲(なぐ)った。私は喧嘩(けんか)は早(はや)かつた。そして非常(ひじょう)な敏活(びんかつ)な、(C)やつてしまふのが得意(ていぎ)であつた。

私は下駄(くだ)をはいてシロと帰(かえ)りかけた。やつと起き上がった彼は、「覚えていろ。」と言(い)った。私は(D)帰(かえ)った。私はそれから道(みち)でシロをなでてやつた。そして「負(ま)けたら帰(かえ)るな。」と言(い)つてきかせた。

ある日(ひ)、学校(がっこう)からの帰り途(かえりみち)のことであつた。裏町(うらまち)の塀(ひ)のところ、上級生(じょうきゅうせい)らしい私(わたし)より大きい少年(せうねん)が三人固(さんにんこ)まつて、私(わたし)の方(かた)を向(む)いて囁(ささや)き合(あ)つていた。気がつくとき、この間の犬(いぬ)の喧嘩(けんか)のときの上級生(じょうきゅうせい)が交(まじ)つていた。私は直覺(ちか)的に待伏(まちふせ)を食(た)つていることを知(し)つた。私はすぐカバン(かばん)の革紐(かわひも)を解(と)いて、さきの方(かた)を固(こ)く結(む)んだ。③私の用意(ようい)は、彼(かれ)らの前(まへ)にまで歩いてゆくうちに整(ととの)つていた。

例(れい)の少年(せうねん)はいきなり私(わたし)の前(まへ)に立ちふさがつた。

「この間のことを覚えていろか！」

と、彼は一歩(いっぽ)前(まへ)へ進(すす)んだ。

「覚えていろ。それがどうしたのだ。仕返(しへん)しをする気(き)か。」

彼はいきなり飛びつこうとした。私は革紐(かわひも)をひゅうと風(かぜ)を切(き)つて、彼の⑤後脳(ごのう)を叩(たた)いた。彼はふらふらとした。その時まで黙(だま)つていた彼の友(とも)達が右(みぎ)と左(ひだり)から飛びつこうとした。私はまた革紐(かわひも)を鳴(な)らした。そのすきに私は足を蹴(け)り上げられた。膝皿(ひざぢ)がしびれた。私は倒(たふ)れた。そして私はめちゃくちゃに叩(たた)かれた。私は彼(かれ)らが去(い)ったあとで目(め)まいがして、やつと家(いえ)へ帰(かえ)った。しかし翌日(あした)はもう元氣(げんき)になつていた。

学校(がっこう)の便所(べんじょ)で昨日(けふ)の仲間(なかま)の一人(ひとり)に会(あ)つた。私は声(こゑ)もかけずにその上級生(じょうきゅうせい)をうしろから撲(なぐ)りつけておいて、④漆喰(しつこ)の上(うへ)へ投げ飛ば(なげな)した。帰(かえ)りに例(れい)の上級生(じょうきゅうせい)が⑤五六間(ごろくかん)さきへ行くのを呼びとめると彼は逃(に)げ出した。私はすぐさま手頃(てごろ)な小石(こいし)を拾(ひろ)った。⑥飛礫(ついでん)は彼の踝(くるも)にあつた。彼は倒(たふ)れた。私は彼(かれ)をそのさきの日(ひ)のように撲(なぐ)った。たくさん学友(がくゆう)らは私(わたし)をとり捲(ま)いていたが、誰も手出(てだ)しをしなかつた。それほど私はみなから敬遠(けいげん)されてた。私は彼(かれ)を尻目(しりめ)にかけて去(い)った。

④私はしかしそういう喧嘩(けんか)をした日はさびしかつた。勝(か)つて相手(あいて)を酷(こ)い目(め)にあわせればあわすほど私は自分(おれ)の中の乱暴(らんぼう)な性分(しやうぶん)を後悔(こうかい)した。してはならないと考(かん)えていても、いつも外部(ぐわ)から私(わたし)の危険性(きけんせい)が誘(さそ)い出(だ)されることに、私は抵抗(ていこう)しがたい自分の性分(しやうぶん)のために、いつもさびしい後悔(こうかい)の心(こゝろ)になるのであつた。

私のそうした乱雑(らんざつ)な、たえず復讐心(ふくしゅうしん)に燃(も)えた根強(ねがた)い一面(いっぺん)は、多くの学友(がくゆう)から危険(きけん)がられていたのみならず、非常(ひじょう)におそれられていたので、親しい友達(ともだち)とはなかつた。私はひとりである時(とき)、外部(ぐわ)から私(わたし)を動か(はな)すものがない時(とき)、私は弱(よわ)い感情的(かんじじ)な少年(せうねん)になつて、いつも姉(あね)にまつわりついていた。

(室生犀星「幼年時代」より)

【語注】

\*1 厭(いと)いながら：嫌(きら)いながら

\*2 裏町：裏通りのにぎやかでない町

\*3 二級：二学年

\*4 組打ち：とつくみあつて争(ま)うこと

- \*5 敏活…すばやいこと
- \*6 後脳…後頭部
- \*7 漆喰…石灰にねんど等を加えてねった壁や天井の材料
- \*8 五六間…「間」は昔の長さの単位で約一・八メートル
- \*9 飛礫…投げるための小石

問一 ……の「の」と同じ使い方をするものを、……の中から一つ選び、記号で答えなさい。

問二 (A) (B) (C) (D) にあてはまることばとして、次の中からふさわしいものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 真つ青になつて      イ ぐつたりうなだれて      ウ 冷笑して      エ 稲妻のように

問三 ———— ①「この哀れな動物にほとんど想像することのできないほどの深い愛を感じた」とありますが、これをわかりやすく説明するとどうなりますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア シロを負かした犬に対して、とても憎らしく思ったということ。  
 イ どこかの犬に負けて帰ってきたシロに対して、とてもなさげなく思ったということ。  
 ウ 自分より大きな敵とたたかっていたシロに対して、とても心強く思ったということ。  
 エ どこかの犬に噛まれたかわいそうなシロに対して、とてもいとおしく思ったということ。

問四 ———— ②「私は冷たさもしらないで雪の上をとんとん踏んだ」とありますが、このときの「私」の気持ちを説明しなさい。

問五 ———— ③「私の用意は、彼らの前にまで歩いてゆくうちに整っていた」とありますが、それはどういうことですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彼らがしかけてきたら反撃する決意をしたこと。  
 イ 彼らにおとなしく殴られる覚悟を決めたこと。  
 ウ 彼らにこの間の仕返しをする決意をしたこと。  
 エ 彼らが気づかないうちに逃げ出す覚悟を決めたこと。

問六 ———— ④「私はしかしそういう喧嘩をした日はさびしかった」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 に 答 え な さ い 。

年が暮れかかっていた。というのはクリスマス後の後だったというおぼえがあるからで、幸田家は早く叔母たちが海外へ留学したのと祖父が植村氏に従って基督教徒になっていたから、毎年十二月二十五日前後には親類中、子供から大人から皆集まってクリスマス交歓をやった。\* 礼拝や\* 祈禱があつたわけではなく、一家親睦の楽しい会だった。子供たちは一人一人、それぞれ伯父や叔母たちからおもちゃや学用品を贈られるしきたりだった。だからクリスマス後には、私の専有にあてがわれている仏壇の下の戸棚も、弟のおもちゃ箱も急に膨張した。二人とももらった絵本やおもちゃを出したり入れたりして、仲よくしたり喧嘩したりした。そういう時であった。父の結婚式以来ふつり消えてしまっていたオバ公さんがひよつくり、何の前触れもなく、\* 内玄関へおとずれて来た。

好きな人ではなかったけれど、さすがに朝夕世話になった親身の人である、なつかしかった。けれど子供心にも継母が来て以後は、オバ公さんはずでにまえの人、過去の人とけじめをつけて知っていたから、なつかしきはなつかしいものの、私は妙にとまどつてはにかんだ。それに父はいつも、ははの前でもこの人をよくいわなかつたので、なにか遠慮めかしいものがあった。オバ公さんもまたすましたもので、私を見かけると、「おや文字さん」なんていった。あんなにいつもアヤチャンと威圧的に小言をいったり、無理にお灸を据えたりしたくせに、よそよそしくも文字さんと取りすまして呼んだから、私はほんとに勝手違いがしていやな心持ちがした。ははは上ぎげんで茶の間へ請じてとりもつていた。出て来いといわれて弟はすぐクリスマスのおもちゃを見せたりしていたが、① 私は頑強に出て行かなかつた。襖越しにオバ公の話し声を聴きつつ、長いことかかつて一人で仏壇の下の戸棚へ、自分の何やら彼やらの財産を丁寧にした。ははが来て、おばさんあげる夕食の② シタクをする間、あなたはお相手をしなければいけないといわれ、まだこじれた気持ちのまま、オバ公さんのまえへ連れて行かれた。

ははが座を③ 外してしまつたと、④ ようようほぐれてきて、自分も今しまったばかりの贈物を持って来て見せようと思ひ、立ちあがると、「文ちゃん、ちよつと」といって着物の裾を掴むやいなや、いきなり上前を引ぬめくつた。私は驚いたがオバ公はほつと溜息をついて、「ああこの下着じゃね」といった。わからなかつたから訊いた。「なんなの？」———黙っていた。そして、「寒くないかい」と訊いた。私はちつとも寒くなかつた。「そうかい、そんならいいけど、それによごれているよー」なんとなくいやだった。それでも、あれこれかかえて来て、これは何おじさんから何おばさんからといつて、つきつきに見せた。⑤ オバ公はふつと、「おまえさんリボン持つてるだろ」といつた。リボンは何本もははが買つてくれて持つて、私の持物第一の貴重品であり、それを披露するとは誇りであった。一番の\* お職は幅広の\* タフタで、紅や薄紫の薔薇の⑥ ハナモリヨウが浮きだしていた。オバ公はそれを大層いいと褒め、私は喜んでほかのをみんな見せた。

オバ公は突然、すず子を知っているかといつた。すず子という名は聞いたことがなかつた。生みの母の繋がり、私にはいとこにあたるのだという話である。大層貧乏なので、もちろんこんなに沢山の山の本や鉛筆やリボンはない。かわいそうだと思わなかつた。

かわいそうに思った。そしたら、「おかあさんに内証ないしよでこのなかのどれでもいいから、すぐ子にやりなさい。一番いいのは知れるといけないから、それでないのがいい」という。どれも人にはやりたくなかったが、弟がそばから、「ア子ちゃん、やつちゃえよ」とそそのかした。彼は自分のおもちやはずぐこわして無くしてしまうくせに、私の財産が彼の分量より多いのをいつもやつかんでいるのだ。私はいやいや、「じゃあどれでも」とリボンの箱を出して、どれを取られてしまいかとびくびくしていた。買ってもらったばかりのまだ一度も結ばない、水色の縞しまへ赤い菊の出ている縞子目しまこめの縞を取られた。がっかりした。オバ公がくるくと巻くと、長い水色の縞は端からつると納まって、ひよっと袖口そでぐちから袂たもとへ入ってしまい、手だけがすぐまた袖口から出て来た。赤い菊には未練が残って惜しく、かあさんに内証の「内証」という釘は利いて、私は口がきげず黙ってあとかたづけをした。

ごはんになった。オバ公さんの膳は客用の会席がつかってあった。父も出て来、賑やかにみんながすわった。あつという間も何もなく、さっきのリボンが低い会席膳の横へ、つるつると巻物をひるげするように流れ出し、赤い花が隠しようもなく、ぱつとしていた。実に私ははつとした。しかしオバ公は白い大きなハンケチを膝のうえにゆっくりとひろげながら、「文ちゃんはいいい子になりましたねえ。どっさりあるからこれをすずによつてくれつていって。」さっきの通りまたくるくる巻いて、今度はちいさい縞子目へしまつてしまつた。私は顔があげられず、オバ公が「俵はたけをもちつて帰つた後はなおさら」に、④「ははを恐れて物陰ものかげにいたかつた。だが、お休みをいわなくては寝られなかつた。「かあさんお休みなさい。」⑤「果たしてははは私の肩をつかまえた。「あなたほんとにあればたの？」私は「せぐりあげて、「すず子」と「内証」を訴えた。ははは何ともいわず蒲団ふとんを着せて、「受くるよりも与あたるは幸いなりつていってごらん」と教え、「また買ってあげる」といってくれた。のちに女学生になって、ふと仁丹にんだんを買つたとき、紙容器に「金言」と題してこの句が刷つてあつたのを見たときに、あらためてははの態度を認めないわけには行かなかつた。⑥「ははにもらつたなつかしい財産の一つである。」(幸田文「みそっかす」より)

### 【語注】

- \*1 礼拝：キリスト教で神をおがむこと
- \*2 祈禱：神仏に祈ること
- \*3 内玄関：家人が使う玄関
- \*4 お職：一番立派なもの
- \*5 タフタ：\*6 縞子目：どちらも光沢のある織物
- \*7 袂：和服の袖の下の袋状の部分
- \*8 信玄袋：口ひものついた手さげ袋
- \*9 俵をもちう：人力車を呼んでもらう
- \*10 せぐりあげて：しゃくりあげて
- \*11 仁丹：口中をさわやかにする飴のような薬
- \*12 金言：教訓を短く表現した言葉

問一 ④「シタク」、⑥「外して」、⑩「ハナモヨウ」について、カタカナは漢字に改め、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 ①「私は頑強に出て行かなかつた」とありますが、それはなぜですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本当はなつかしくてたまらないのに、久しぶりに会つたのでとまどつてしまい、オバ公さんに何を言えいいのかわからなかつたから。
- イ オバ公さんはまえの人、過去の人とけじめをつけていたので、オバ公さんと親しくしていると継母や父にあとでしかられると思つたから。
- ウ 以前の無遠慮さとは全く違ふ、よそよそしい態度ですましているオバ公さんに対して、素直に接する気持ちになれなかつたから。
- エ オバ公さんのことを日ごろからよく言わない父に遠慮して、オバ公さんのお相手を押しつけようとする継母に反抗したから。

問三 ②「ようよう」、⑤「果たして」をわかりやすく言いかえなさい。

問四 ③「オバ公はふつと、『おまえさんリボン持つてるだろ』といった」とありますが、「オバ公さん」はなぜ文字のリボンを見たがつたのですか。わかりやすく説明しなさい。

問五 ④「ははを恐れて物陰にいたかつた」とありますが、それはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問六 ⑥「ははにもらつたなつかしい財産の一つ」とありますが、それは何ですか。本文中の言葉を使って答えなさい。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ひとはつねに正直であれ、というのは、ひとつののぞましい道徳律である。そうあつてほしい、と学校でも家庭でも教えられる。そして、それと対の道徳律として、ウソをついてはいけません、とも教えられる。いずれも正しいことだ。

しかし、そう教えられたから、すべての人間が、すべての場合に正直で、ウソをつかない、と信ずる人がいるとしたら、①「それはお人好しを通り越して、むしろ愚かな人物ということになるのではないか。おたがい自分自身をふりかえてみたらよい。ずいぶんいろんな②「キカイに、われわれは正直でない。考えていることを、いささかのいつわりもなく、つねに語りつづける、などという人は、残念ながらこの世のなかにはいないようである。」

あえて、正直、不正直、という尺度ではからなくてもよろしい。ひとからものを問われたとき、われわれはおおむねみずからが正しい、ということ、②「ありつたけの知恵を動員して合理化するものなのだ。法律のうえでも、われわれは、自分に不利益なことについては口をつぐんでいてよい、ということになつてゐる。それは、けつしてウソではないが、ひとは、自分の知つてゐることのすべて

を話すことはないし、話さなければならぬ、という義務もない。

そのことは、いまここで主題となつてゐる取材という行為にとつてきわめて重大な問題である。取材というのは、ある目的にとつて必要な情報をあつめる、ということだが、そのあつめる情報にはひとつだけ最低の条件がある。それは、その情報が正しい情報でなければならぬということだ。

じつさい、われわれの身のまわりにはおびただしい情報がひしめいており、どんな情報でも自由にあつめられる。このたぐさんの情報がすべて正しい、という保証はどこにもない。いや、かなりアヤフヤな情報がいつぱいふくまれていて、とみるべきであろう。まことに無責任なジャーナリズムの記事もある。誇大広告もある。いたつてもっともらしい話を③まにうけて信じていると、とんでもないところでそれが真つ赤なウソであることがわかつたりすることもある。新聞の社会部には、天下の一大事、式の通報電話が一般の人びとからかかつてくることがよくあり、新聞記者はそういう電話に④色めき立つが、それはしばしばまったく根拠のないつくり話であつたりする。そういうインチキ情報、すなわち新聞用語でいう「ガセネタ」は、この世のなかに充満している。

テレビのアフタヌーン・ショー、というのを見ていたら、家出した少年さがしをやつてゐた。画面には息子に家出された両親があらわれ、涙ながらに、早く連絡してくれ、とどこにいてもわからぬ少年にむかつて呼びかけてゐる。それにつづいて、その少年の顔写真が画面に大うつしになる。アナウンサーは全国の視聴者にむかつて、この子に心当りのあるかたはどうぞスタジオに電話してください、と訴える。その番組を見ていたわたしは、びっくりした。というのは、ほとんど⑤間髪をいれず、スタジオの電話がじゃんじゃん鳴りはじめたからである。スタジオでは、数人の受付係が電話をうけていたのだが、それがほとんど一斉に鳴り、それぞれにその少年についての情報をもたらした。アナウンサーがそれらをとりまとめていうには、このおびただしい電話は、新潟、名古屋、浜松、仙台、福岡などほとんど全国いたるところからかかつており、そのすべてが、最近その少年らしい姿を見かけた、というのである。

そのすべての情報が正しいと仮定するならば、⑥この少年は、たいへんにおびただしい旅行を続けているのだ、といわなければならぬまいが、どうも、それはありそうな話とは思えない。電話をかけた人たちは、それぞれに⑥カクシンと善意をもってダイアルを回したのだから、誰にでも思いちがひというものはある。それに、この数ある通報者のなかには、ふとしたいはずら心から電話をかけた無責任な人も何人かはまじつていたにちがひない。そして、だじなことは、これだけたぐさんの通報があつたにもかかわらず、結局、この少年の所在をたしかめるに足る、必要な情報はひとつもふくまれていなかった、という事実である。ひっきりなしにスタジオにかかつてくる電話は、まさしく「情報化社会」を眼のあたりに見せつけてくれるような壮観であつた。だが、その結果、なにが得られたか、といえは、じつのところ、なんの効果も収穫もなかつたのである。⑦わたしは、「情報化社会」なるもののむなしさのようなものをごとで見たような気がする。

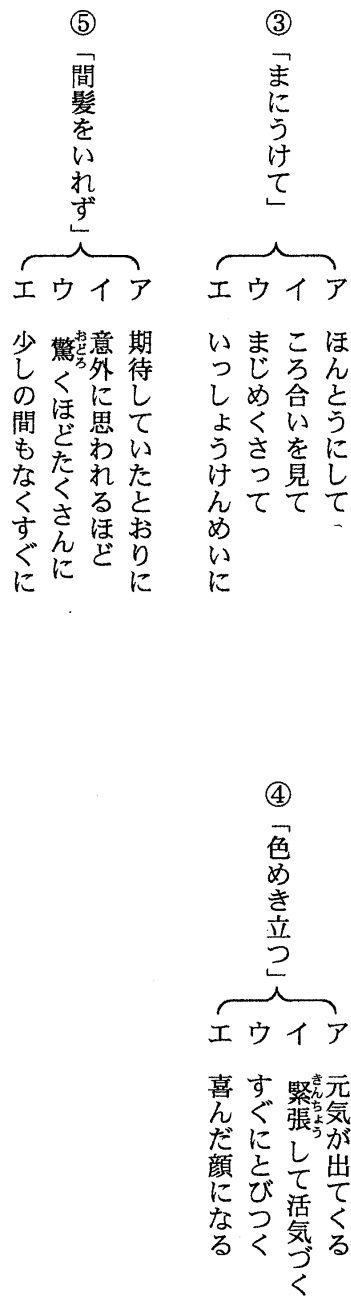
(加藤秀俊「取材学」探求の技法」より)

問一 ①「キカイ」、②「カクシン」について、カタカナを漢字に改めなさい。

問二 ①「それはお人好しを通り越して、むしろ愚かな人物ということになる」とありますが、それはどうしてですか。その理由を本文中の言葉を使ってわかりやすく説明しなさい。

問三 ②「ありつたけの知恵を動員して合理化する」とありますが、それはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 ③「まにうけて」、④「色めき立つ」、⑤「間髪をいれず」の意味としてふさわしいものをそれぞれ後のア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。



問五 ⑥「この少年は、たいへんにおびただしい旅行を続けているのだ」とありますが、どうしてこのようにことが言えるのですか。わかりやすく説明しなさい。

問六 ⑦「わたしは、『情報化社会』なるもののむなしさのようものをそこで見たような気がする」とありますが、どのような気持ちで述べたのですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 新聞記者やテレビのアナウンサーの呼びかけに対して全国からたくさんの方が情報が寄せられるが、そのすべてがインチキ情報であり、そんな社会を「情報化社会」というのはおかしいと深く疑う気持ち。
- イ 新聞でもテレビでも、全国あちこちから、しかも短い時間にたくさんの方が情報が寄せられることは「情報化社会」のすばらしさのあらわれだが、その情報が必ずしも全て正しいわけではないことに對する満たされない気持ち。
- ウ 新聞やテレビで流される情報は一瞬のうちに全国あちこちに広がっていき、その影響力はかなり大きい、それらの情報は必ずしもすべてが真実というわけではなく、そんな「情報化社会」の一面を残念に思う気持ち。
- エ 新聞やテレビが読者や視聴者を少しでも多く獲得するために、ワイドショー番組を多くしたり、時にはヤラセなどのことを平気でやっているジャーナリズム中心の「情報化社会」に対する激しい怒りの気持ち。